

記憶の糸をたどりつつ -ベビーブーマーとしての大学教育-

並木 信明

月並みな表現だが気がついたら定年を迎えていた。

昭和23年1月1日に生まれたことになっているので、実感はないがあとわずかで70歳となる。

いわゆるベビーブーマーで、学校ではすし詰め状態で、高校や大学受験では同世代の多くの人たちと競わされてきて、何事も競争が当たり前であった。

何においても欧米に劣っている（とかつては強迫観念のように思い込まされていたが）、日本社会の問題点などについて、大真面目に友人たちと話し合うと、結局資源も資本も先端技術もないが、日本には人手だけは有り余るほどあるよ、と決まって物知り顔にいう輩がいて落ちとなったものだった。

あれから半世紀を経て、物質的には衣・食・住（住は相変わらずやや弱い）が満たされ、都会では高層ビルが立ち並び、車や高速鉄道などは世界のトップレベルになったが、医療の進歩で高齢者が増加し、若者が減少し大学が受験生確保に必死となり、そもそも大手予備校が浪人の減少で経営が成り立たなくなるなど、50年前には想像すらしなかったような事態となっている。

年寄りの思い出話は、とかく退屈なものが多いが、英語教員の中でも同世代の人が激減し若い人が多くなった現状を見ると、私のこれまでの体験話もひょっとすると興味を感じてくれる人もいるのでは、と期待しつつ私の大学生活について語ってみたい。

1. 自分が受けた大学教育

大学教育を巡る環境は学生にとっても教員にとっても大きく変わったが、最初は自分が受けた大学教育を取り上げる。

私の大学教育は北海道大学の理類入学に始まる。1年浪人したので、大学では自分がしたいことをしようと思ひ、大して体力があるわけでもなかったが運動部（スキー部）に入ったのが運の尽きだった。部の先輩から授業は試験だけ受ければ大丈夫と言われたのを真に受けて、基本的に語学と実験実習以外は真面目に出席しなかった結果相当な単位を落としてしまった。

しかし一方で、大学の学問は講義を一方的に聞くのではなく、興味を持ったことについて調べたり、読書したりして自ら学ぶのが真の学問だという言葉に妙に傾倒し、文学を中心に読書は励み、理系であっても文学好きな学友たちと夜遅くまで議論したものであった。

北大には3年間しかいなかったが、自分の人生に大きな転機を与えたことが3つある。

1つは、教養の担任が鈴木重吉という、すでに故人となっているが、ナサニエル・ホーソーンの研究者を通してアメリカ文学を知るようになったことである。

2つは、1年目の夏に参加した海外旅行で、ドイツ・オーストリア・フランス・イタリアなどの古都を巡り、壮麗な大聖堂、華麗な王宮、夥しい絵画や彫刻に飾られた美術館、そして中世の石畳を敷き詰めた歴史的な町並みなど、ヨーロッパ文明の壮麗さに圧倒されたことである。

3つは、入学3年目にすでに工学部生となっていた北大でも大学紛争が勃発し、大学が学生によって占拠・封鎖され、大学の講義がボイコットなどにより、長期にわたって中止されてしまい、いつまでも連続していると思われた現実の崩壊を目の当たりにしたことである。

この中で最も影響力が大きかったのは、なんと言っても大学紛争であったが、他の二つもこの時の進路変更の大きな役割を果すこととなった。

専修大学でも紛争は激しかったと聞くが、学長や教授たちをつるし上げる大衆団交は衝撃であった。「君たち」と呼びかける教授側に対して、「おまえ本当に反省しているのか？」などと政治的な立場から教授側の非を攻撃する、半ばプロ化した学生闘争家やそのシンパたちの言動は、自分が大学の教壇に立ったときも常に遠雷のように耳に残るほど、一種のトラウマのごとく存続し続けたのである。

教員になってからも、「お前は自分が教えていることの意味を本当に知っているのか？」と、もし学生から問われたらどうしようかと、回答を見出せないまま本気で自問し続けて来たものであった。

大学の授業が中断されている間、『資本論』や『共産党宣言』そして吉本隆明などの左翼系思想書の他に、大江健三郎、三島由紀夫、吉行淳之介などの日本文学、さらに当時人気のあったサルトルやヌーボー・ロマンの作家の本を読み、ジョイス、プルースト、T.S. エリオットなどのモダニストに加えて、アメリカ文学ではフォークナーの名を覚え、重要作家と認識するようになった。

大学紛争当時、大学を中退して好きな道を歩む人もいて、私も中退して小説家か物書きになりたいと無謀にも思ったが、親に説得されて東京に戻り立教大学の英米文学科に編入して大学を卒業することにした。

この時アメリカ文学を研究するには北大よりも東京の大学が良いと薦めてくれたのが、日ごろから何かと相談に乗ってくれていた鈴木先生であった。また先のヨーロッパ旅行の際に、アメリカ研究をしたいと漠然と思っていたこと、そしてフォークナーは研究に値する作家と認識していたことも、立教大学に移る動機の1つとなった。

立教大学では、日本のフォークナー研究の先駆者の一人である原川恭一先生のゼミに参加できたことが、その後フォークナーを専門的に研究する重要な第一歩となった。3年編入なので英米文学の基礎知識もないくせに、ゼミで生意気な発言をする私を、時には酒を酌み交わしながら適切に指導してくださった原川先生の教育は、大学教員になってからの私の基準となった。

2. 大学教員になって

最初に採用されたのは秋田大学教育学部で、31歳ですでに結婚して、3歳と生まれたばかりの子を抱えての生活は楽ではなかったが、1学年定員8名の英語専攻の学生の英語力は結構高く、真面目なので教えやすかった。

秋田は酒どころなので、教員同士、教員と学生の間で、歓迎会や送別会などがあると必ず酒が供せられ、酒を通してのコミュニケーションが盛んで、卒論指導（英語で書く）や授業について話すことも少なくなかった。

しかし、赴任後5年ほど経って地方大学の牧歌的な雰囲気が一変してしまった。教育学部に大学院が設置されることになり、文部省（当時は文科省ではなかった）の大学院の設置基準委員会によって担当教員の業績が審査されることになったのである。審査に通るためには、講義および学位論文の指導が担当できる「マル合教員」か、講義および学位論文指導の補助が担当できる「合教員」になる必要があり、マル合になるためには論文数が30～40本程度が必要という情報が流れ、それから必死になって論文を増やす努力をしたのである。

私はすでに助教授になっていたが国立なので教授のポストは数に限りがあり、すでに埋まっていっていくら業績を積んでも当面昇任することは見込めなかったこともあり、大学院の資格審査くらいは助教授のままマル合資格を取りたいと思っていた。学会発表や論文数では英語科の中でもトップクラスであった（と思っている）が、結局ほとんど業績のないような教授がマル合となり、私は合の判定であった。学会で知り合いの先生から、秋田大学の教授（ほとんど業績がなかった）が審査委員（本来は非公開）を探り当て、個人的に泣きついたことをあとで知らされた。

さらに精神的に大きなダメージを加える出来事が起こった。それは1年間の在外研究制度の問題であった。教育学部では5ないし6の学科があり、毎年各学科から1名の教官が選ばれて海外に研修に行くことになっていた。英語専攻では赴任して10年目くらいでようやく私の番となり、同じ学科内でも次は私と目されていた。ところが同じ学科の別の専攻の教官が50歳とい

う年齢制限に対してラストチャンスに応募をし、私は選考されなかったのである。その教授は口は出すが仕事はしない左翼系の問題教授と見なされていて、直前まで応募はしないと言っていただけにショックは大きかった。

次にわれわれの学科に回ってくるまで5、6年かかることもあって、アメリカのACLSの奨学金（フェローシップ）に応募し、1年間North Carolina大学Chapel Hill校(UNC)に家族連れで行くことが決まった。丁度その時に学会で私の論文や研究発表を評価していた山梨大学教育学部英語教室の教授から、応募の誘いを受けた。ACLSが決まったのが1990年の6月頃で、Chapel Hillには1992年1月から1年間研究に行くことになっていた。山梨大学の教授は1991年3月に退官する予定で4月に赴任しないかと言ってきたのである。4月に着任して半年後にアメリカに1年間研究に行くので山梨大学に迷惑がかかるからと固辞したのであるが、それでも結構だから来てほしいと言われ、東京の両親も賛成したことから、山梨大の英語教室の方々には申し訳ないと思いつつ甲府に移り住むことにした。

請われて転任したはずであったが英語教室のスタッフの反応は予想とは異なりやや冷たかったが、退任した教授の真意が私にも教室の先生方にも十分に伝わらなかった結果だったのであろうと、今では冷静に考えられる。

山梨大は東京に近いので学会・研究会に定期的に顔を出すことができるようになり、アメリカ文学の研究は進んだが、山梨大学教育学部でも大学院修士課程の設置が進められ、それに加えて1991年の大学設置基準の大綱化に従い、文部省指導でさまざまな大学の改革が進められ、情報科学関係の委員会も文系委員としてかかわったりしたので、気が付くと10くらいの委員会に所属して校務に忙殺されるようになった。

国立大学の忙しさに音を上げ始めたころ、専修大学文学部英米文学科でアメリカ文学のポストが空いている話を聞き、応募し転任することになった。大学院博士課程まで担当できる教授ということで迎え入れていただくことになり、文学部で自分の専門を生かした講義ができることに胸躍らせて生田キャンパスに赴任したのであった。

山梨大学教育学部ではちょうど教育人間科学部に改組する作業の真っ最中で、翌年の新学部の発足を控え、文部省の認可申請書類の教員リストに載っていたのを外してもらい、山梨大学を割愛してもらうために当時の専修大学の文学部長にわざわざ甲府まで来ていただき、教育学部長にご挨拶をしていただいたのは1997年7月のことであった。翌98年4月に山梨大学教育学部は教育人間科学部となり、私は専修大学文学部の教授となった。

3. 専修大学に移って

定員10名足らずの国立大学の英語専攻の学生と100名を超える学科の学生の英語力の差を問うこと自体妥当ではないが、英米文学科に移ってよかったと思ったのは英米文学の素養があり、翻訳頼りでも小説が好きだという学生が少数でもいたことであった。国立の教育学部に入学する学生はどの教科もそつなくこなす一方で、外国の小説や詩をたくさん読む文学好きの学生は少なく若干寂しい思いをしていたのである。

しかし私が英米文学科に入ってからすぐに学科名に「英語」が加えられ、「英語英米文学科」に変わった。学科の新入生の大半が、英米文学を学ぶためではなく、英語力の向上を目指していることが次第に顕著になったという、時代の変化を反映した学科名称の変更であった。このとき退職した英文学の教授が後任として同じ英文学ではなく、応用言語学の分野で特に通訳の専門家を取るべきだと主張し、その結果田邊祐司氏が採用され、コミュニケーション・コースが充実していった。

教える教科の内容が全面的に変わったわけではないが、学科名称を変えることで受験する学生の質や性別などが変わるという現象は確かにあるようである。受験生の減少が目立ち始めたわが学科では受験生が増加したし、おしゃれな女子学生が増えたとも言われた。他学部では商学部の商業学科がマーケティング学科に変更して、女性受験生が増え、受験生が大幅に増えたことも同様の例である。

新学科の立ち上げに合わせて、カリキュラムの改正が行われ、英米文学科の科目の大幅な見直しがなされた。

コミュニケーション能力の向上を図るため、通訳関係の科目を増やしたり、英語による講義科目などを増設した他、特に新生生の4技能の充実のために、外部英語力テストを導入して完全な習熟度別クラス編成にした。目立って英語力が向上する学生が出た半面、最下位のクラスに配属された学生の中には入学早々やる気を失う学生も出た。それを受けて4月の外部テストではまず成績順のリストで上位と下位と二分して、下位の学生は成績ではなく学籍番号順にリストを作ってクラスに分けることにしたが、それでもA, B, C, Dの4クラス（「オーラル・コミュニケーション」と「コンポジション」ではさらにそれぞれを2分割する）に分けるとDクラスは英語力が一番低いとの劣等感を持つ学生が多かった。

私はCやDなどの下位クラスで教えることが多く、大した英語教育のノウハウがあるわけではなかったが熱意だけはあり、私のクラスは秋のTOEICで伸び率が高いのが自慢でもあった。しかし指導の失敗もあった。2月の合否判定で合格者の手続き率の予想が外れ、例年なら他大学に流れる成績上位者が大幅に残り入学手続きをしたために、合格手続き者が多い年の人数よりもさらに25名くらい増えてしまったので、急遽Eクラスを増設してもらい、学科長であった私とそのクラスの担任としてリーディングを担当することにした。

このクラスは英語力は女子の方が高く学習意欲も旺盛だったが、男子は英語力でやや劣るだけでなく消極的な学生が多かった。男子の中でやや癖のある学生がいて、私がそれまで使用してきた教科書にケチをつけたり、このクラスは「最下位のどーでもEクラスなんだ」などと他の男子学生たちに言いふらしてしまい、その結果クラスは女子と男子に分断され、クラス崩壊のような形になった。秋のテストでは女子は高得点者が続出したが、男子は数名を除き下位のままだった。私はなぜこうなったのかいまだに理由が分からない。今の自分であれば、問題の学生も説得することが出来たのではない。

いかと思うが、過去は戻らないのである。

私にとって特に思い出深いのは、「聖書とキリスト教」を「キリスト教文化論」と名称変更し、文化論的視点から幅広くキリスト教の基礎知識を教える科目として新設したことである。しかしその主旨は良かったが担当する教員が見当たらなかった。聖書とキリスト教を聖書や宗教史はもとより、美術、教会建築、音楽、小説、映画（ミュージカルを含む）のすべての観点から、その基礎的な部分だけでも教えられる人材は、学内はもとより、外部でもその時点では見当たらなかった。神学関係者も考えたが、キリスト教信者の育成を本質とする神学者とは異なる、もっと自由にキリスト教文化を講じてもらいたかったので断念した。

結局、学科長として新カリキュラムの編成に携わっていた私が引き受けることにした。キリスト教信者ではなかったが、中高一貫のミッション系の学校に入り3年間は寮生活をして、一日4回の礼拝を経験して聖書も毎日読まれた経験があり、大学では聖公会の立教大学で King James Version の英訳聖書の科目を必修として受講させられていたので、その経験を生かして基礎的講義をしようとしたのである。

特にキリスト教絵画や教会建築については専門家の講義を受けたり、キリスト教音楽は講義と演奏を聴きに行つて自分なりに勉強して講義に望んだが、最初の数年は教えながら手ごたえがなく、受講生には気の毒なことをしたと思っている。もともと医者と教師は実践を通して成長すると勝手に思つて教えてきた人間ではあるが、やがて自分はいずれ古びてしまう専門的知識を伝授するのではなく、古代・中世・近代においてキリストの信者たちが、建築、彫刻、絵画（壁画・ステンドグラスを含む）、音楽、文学、演劇・映画などを通してどのように、彼らの信仰を表現したのかを垣間見させることによって、受講生の興味をかき立て、自ら調べ始めることが究極の目的であると見定めるようになって（つまり一種の居直りをして）、気持ちや楽になり教えやすくなった。

キリスト教文化の各分野で専門的に研究したいと思い現地調査まで行ったのは、中世フランスを中心に広まったゴシック大聖堂であった。フランス語でタンパン (tympanum) と呼ばれる、細密な彫刻や彫刻で飾られた扉口をくぐると、円形のバラ窓や左右の壁面一面に並ぶ細長いステンドグラスの窓から注がれる、赤・青・緑・黄色の光線が、まるで森林の巨木を思わせる太い柱が連続的に優雅なアーチを形成し、高い天井を支える、暗い堂内を特別な空間に仕立て上げ、ミサの合唱や巨大なパイプオルガンの響きが加わると、さながら地上の神の国を体感した気分になる。

中世の大聖堂はミサを行う場であっただけでなく、宗教劇が演じられ、音楽会が開かれ、集会や裁判さえ開催されて市民生活の重要な中核を担っていたのである。かつては、キリスト教という宗教を中心に人々のライフ（人生・生活）と文化が一体化した世界に生きていたことを、そして古代神話（ギリシャ・ローマ）とローマ帝国の遺産がそれらを支えていたことを現地で体得できたことは、個人的にはキリスト教文化論の講義とアメリカ文学研究に大いに役立ったと思っている。

ヨーロッパ的な過去を持たないアメリカでモダニズムを主唱する場合と、幾多の試練（戦火や破壊活動）を経て存続する古代・中世の遺産を持つヨーロッパがモダニズムを主張する場合とは全くコンテキストが異なることに気付かされたのは収穫であった。旧世界を飛び出して建国したアメリカでは“modern”は一般的にポジティブな意味になるが、ヨーロッパでは旧体制の破壊と革命と結びつき、“modern”にはポリティカルな響きが付きまとう。

しかしアメリカにおける“modern”の解釈は、北部と南部で異なるようだ。私の専門とするミシシッピ州出身のウィリアム・フォークナーの保守的な母は、“modern”という言葉をひどく嫌ったという。19世紀前半準州ミシシッピが州に昇格したばかりの頃、その北部に移住しオクスフォードの町の建設に携わり莫大な財を築いた祖父を持つフォークナーの母は、南北戦争前から再建時代を経て受け継がれてきた白人支配の秩序の信奉者であり、南部の保守層の代弁者でもあった。このように親兄弟そして近隣を守旧派に取り囲

まれて育ったフォークナーのモダニズム小説は、単に文学的な実験にとどまらず、極めて革命的な反社会的運動でもあった、ということを最近ようやく理解するようになった。

秋田大学に始まり、山梨大学、そして専修大学と3つの大学で勤務したが、専修大学が20年と一番長くなった。20年もいるといろいろな先生が加わり、他の大学に移り、退職するのを目にしてきたが、一番印象深く思ったのは人は死ぬということと同僚の死を通して感じたことだった。入職して5、6年で英米文学科の学科長だった山岸先生の葬儀に参列し、その後退職した大島先生の訃報があったがそれ以降は、次第に私の同年配か年下の同僚の逝去を聞くようになった。現職のまま志半ばで命を落とすのは、当人はもとより、ご家族にとっても口惜しい限りであろう。

人に誇れるものが少ない私ではあるが、ここ10年程は風邪はもとより病気で講義を休んだことがないことは、小学校では何かと休みがちであった自分にとって信じがたいような健康体に変貌したことを意味しており、ひそかな自信となっている。その大きな原因としてここ10年程体育会のボクシング部に関わってきた（最初は監督として、その後は部長として）ことがあげられるが長くなるので別の機会に話したい。

英語英米文学科を始め、近年では専修大学の入学者の大半が神奈川や近県からの出身者で占められるようになり、かつてのように日本全国から来るとも少なくなったせいか、学生は全体に均質でおとなしく教えやすくなっているが、若干物足りない気がしないでもない。教養英語でも習熟度別クラス編成になってからクラスの均質化が進み、一層その印象を持つようになった。

しかし一方で教えやすくなったことも事実である。ここ数年は商学部のアやBクラスを担当させていただき、英語力もあって反応も良く、こちらも辞めることが間近に迫ってから、居直りというのか肩の力が抜けて、楽しみながら教えられるようになった。あるクラスでは最後の授業の終わりに数名の

学生が寄ってきて来年もこのクラスを担当してくださいと直訴されたこともあった。英語英米文学科でも1, 2年の担任になったり、英語の科目を教えるとその7, 8割の学生は2, 3, 4年の講義や演習科目を真面目に受講するようになっている。もっと若い頃から学生の心をつかんで教える方法を実践すればよかったと、退職直前に自覚するようになったがすでに遅い。

最後に英語に携わる多くの先生方や教務課そしてCALLの事務の方々には大変お世話になりました。最後に御礼申し上げ、また皆様方のご健勝とご活躍を祈念して私の言葉としたい。ありがとうございました。